

高校地理歴史科(日本史)における 市民性を育む歴史の授業研究

学籍番号 (199326)

氏 名 (曾我部恭寛)

主指導教員 (手取義宏)

1. はじめに

歴史教育の目標は公民的資質の育成である。学習指導要領に公民的資質の具体的な定義づけはされておらず、社会科教育学者によっても考え方に差異がある。

吉村(2003)は公民的資質を合意形成能力と捉えた。また溝口(2002)は、公民的資質を「自主的自立的判断による開かれた価値観形成」と捉えた。

森分(1996)は公民的資質の育成のためには「社会認識の形成」が必要だと主張する。

また社会科の教師の立場として、石垣(2017)は歴史学習における市民的資質について、当事者意識を持って歴史学習に臨み、他者や事故の意見を相対化して、物事を批判的に考察することができる力と定義づけた。これらの授業理論に共通するものが、「対話・価値判断・当事者意識」である。

2. 歴史の学習におけるエンパシーの活用の意義と具体的な授業の構想

公民的資質の育成に向けて、歴史の学習では「共感的な学び」が重要視される。共感とは、エンパシーとシンパシーの2つの意味を持つが、この場合は自らの見解から他者の考えや感情を想像するという意味を持つエンパシー(感情理解)を指す。歴史の授業においてエンパシーを活用するという事は、遠い時代の人々の行動や考えについてより共感的に理解しようとする事である。

本実践では第1時で、映画『あゝ野麦峠』を用いた授業を行った。本授業のねらいの1つは、大戦景気により日本の近代化が進んだ背景には、たくさんの名もない貧しい女性たちが低賃金・長時間労働という劣悪な労働環境で、命からがら生糸の生産に従事していたことを理解させることである。

3. 男女共同参画社会の実現に向けてのジェンダー視点での歴史教育の必要性

歴史の学習の中で、誰しもが将来直面するであろう切実な問題として、ジェンダーに関する問題が挙げられる。日本は男女共同参画社会の実現に向けて、戦後様々な取り組みが行われてきたが、未だ世界各国に比べると男女の格差が激しい国である。

一方で学校を中心に生活する高校生にとって、ジェンダーの問題はあまり意識されない。歴史の授業のなかで、現在の職場や社会に残る男女格差の問題について、女性の社会進出の来歴をたどることで、女性の地位向上の到達点と課題を見出すことができる。

4. 生徒観を把握するための意識調査

本実践のプレテストとして、生徒の歴史の授業観とジェンダー観を把握する意識調査を行った。その結果、歴史の勉強は大切だと考える生徒が大半を占める一方で、学習内容について本やインターネットを通して調べてみようとする生徒はあまり見られなかった。このことから歴史の学習が授業内のみで留まっておき、生徒が生活する上での必要性は感じられていないことがわかる。

ジェンダー観については、性的役割分担意識を明確に持つ生徒は少ないことがわかった。また日常生活の中で、ジェンダーに関して違和感を持ったない生徒がほとんどであった。

5. 授業の計画

第1時では、第一次世界大戦の性格と日本に与えた影響について学習する。第2時では、大正・昭和期にかけての女性のあゆみについて学習する。第3時では、戦後の女性の社会進出を学習したうえで、現代社会に残る男女格差の問題について考察をたてさせる。

6. 実際の授業の様子

第1時では『あゝ野麦峠』の学習を主題とした。映画を鑑賞する前にあらかじめ発問を行い、その答えを考えながら見るように指示した。机間巡視しながら記述の様子を見ると、ほとんどの生徒が、自分なりの考えを書いており、エンパシーの活用した学習となった。

第2時では資料「新旧民法における女性の権限」の5つの項目について比較を主題とした。どの項目の変化が女性の地位向上に貢献したか順位付けを行い、その理由を記入させた。大半の生徒は発問の意図を理解し、順位付けを行っていることが確認できた。

第3時ではこれまでの歴史の学習を踏まえ、現代社会の職場や家庭内の格差について検討することを主題とした。そのとき身の回りの大人たちの働き方や生活と関連付けて考えるように促した。

7. ワークシートの分析

第2時と第3時のワークシートを分析することで、生徒のジェンダー意識の変容を明らかにした。ワークシート2の記述から、多くの生徒に自身が持つジェンダー・バイアスに気が付くことができた。また社会に残る男女格差の問題について目を向けようとする姿勢をもたせることができた。

8. おわりに

本研究の成果は次の2つである。1つ目は、エンパシーを活用する授業を構想することができたことである。2つ目は誰しものが将来直面することになる男女格差の問題について、歴史を振り返ることで検討する授業を構想できたことである。

一方で課題は市民性が育成することができたか、客観的な評価を行うことができなかったことである。今後市民性を育成する授業を目指すうえで、紙面調査からは見えない行動面での意識の変化や、単元ごとではなく長期的なスパンでの評価の方法を検討する必要がある。